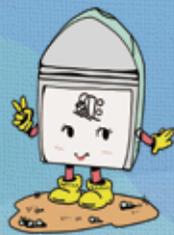


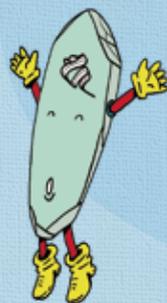


東北学院大学博物館 展示図録



KOREMITE

vol.11



目次

ごあいさつ	P1
1. 板碑って何?	P2
2. 中世松島への招待	P4
3. 霊場雄島の風景	P6
4. 雄島周辺の海底を調査する	P8
5. 雄島海底板碑コレクション	P10
①源政行が立てた二つの板碑	
②変身! その1 種子を改刻した板碑	
③変身! その2 板碑の石材を硯へ転用?	
④銘文の配列に特徴あり	
⑤娘の往生を願う親心	
⑥くらべてみよう 関東の板碑と形を似せる?	
⑦つくりかけの板碑かも?	
⑧戦前に調査されていた板碑を発見!	
雄島海底板碑群 板碑石材採集マップ	P20
参考文献	P21

この冊子は、東北学院大学博物館の常設展示「中世の霊場と信仰 松島の世界」の内容と、展示している板碑の一部を紹介するものです。大学博物館学芸員の七海雅人と日本中世史ゼミ2025年度3年生(楠知暁、佐々木詩央、佐藤航平、白谷悠貴、渡邊奏輔、渡邊隆仁)が、執筆を担当しました。編集にあたっては、瑞巖寺宝物館の新野一浩氏と九州大学大学院生の高橋寛宇氏から、多くのご教示をいただきました。板碑No.1~10・12・13の写真、1・6の拓本および12の図は、新野氏からご提供いただきました。記して感謝を申し上げます。

ごあいさつ

東北学院大学博物館の展示室の奥には、開館した当初から、たくさんの石碑が展示されています。これらの石碑は、中世と呼ばれる時代、鎌倉時代から戦国時代にかけてつくられました。板状や柱状の石材が用いられ、加工されていることから、板碑いたびと呼ばれています。

宮城県には、板碑がたくさんのおさかれています。東北学院大学文学部歴史学科の日本中世史ゼミずいがんじは、瑞巖寺宝物館との共同プロジェクトとして、松島町雄島の板碑調査を続けてきました。大学博物館に展示されている板碑は、この調査によって海底から発見されたものです。展示はすべて、日本中世史ゼミに所属する大学生が作りしました。これだけたくさんの板碑を展示している施設は、めずらしいのではないのでしょうか。ぜひ板碑の現物をご覧になって、観光地とは異なる「もう一つの松島」、中世という時代へ想いを馳せていただければと思います。



東北学院大学博物館の常設展示

1. 板碑って何？

板碑を造立する文化は、鎌倉時代の前半、現在の埼玉県から始まり、全国へ広まったと考えられています。宮城県でも多くの板碑が立てられました。これまでに確認できた数は、6,000点以上といわれています。

碑面の上の部分に仏などをあらわす梵字(古代インドの文字に由来するサンスクリット)や図像を彫刻し、下の部分に年月日や文字(願文)などの銘文を刻むのが、板碑の特徴です。おもに、亡くなった親族などが仏に導かれ、浄土の世界へ旅立つことを願い立てられました。また特定の仏を信仰する人たちが講を結び、そのサークル活動の記念として立てられたものもあります。

お寺や神社の境内、旧家の敷地、郊外の旧道沿いなどには、さまざまな石碑を見ることができます。その中には、中世の供養塔である板碑が含まれているかもしれません。ぜひ探してみてください。

さまざまな梵字

梵字によって刻まれた諸尊(仏や菩薩)は、種子と呼ばれます。



拓本と実測図

板碑の調査では、銘文を読むために拓本をつくります。碑面に和紙を貼り付け、その上から墨をうち、銘文を写し取ります。また、板碑の大きさを計測して実測図を作成し、碑面の情報を資料化します。



- ← 種子の荘嚴(飾り)
えんそうがぢりん
- ①円相(月輪)
- ②蓮座
- ← 銘文割り付けのための野線
- きねんめい
- ← 紀年銘と願文



板碑 No.1

Medieval Stele 01

- 種子 キリーク
- 年代 暦応4年(1341年)6月27日 北朝年号
- 法量 高さ70.0×幅27.0×厚さ5.8cm
- 石材 砂質頁岩(井内石)
- 被供養者 智性禅門
- 雄島海底より採集(2008年8月1日)
- 採集No.1108

※石材の比定は、碑面の観察から推測しました。厳密な鑑定は今後の課題です。

2. 中世松島への招待

松島町の瑞巖寺は、伊達政宗が造営した桃山建築、政宗の位牌を納める寺院として有名です。瑞巖寺が所蔵する記録「天台記」によれば、その歴史は、比叡山延暦寺の高僧であった円仁(慈覚大師)が、826年に天台宗の延福寺を創建したという伝承に始まります。

鎌倉時代になると、延福寺は鎌倉幕府の庇護を受け、13世紀半ば、北条時頼によって禅宗の寺院へと変えられました。寺号も円福寺となり、時頼が帰依した蘭溪道隆(大覚禪師)が住職につきます。2011年、瑞巖寺本堂の地下が発掘調査された際、鎌倉の建長寺の影響を受けた円福寺の伽藍跡が発見されました。

円福寺の禅宗勢力は、6代目の住職・空巖覚慧(覚満禪師)の時に、松島全体へ影響力を広げたと考えられます。また、北条氏と直接結びついた円福寺は、宮城県北部へも勢力を拡大していきます。室町幕府が成立した後も、天台宗の勢力と対抗しながら、松島における仏教信仰の中心にあり続けました。

瑞巖寺内の発掘調査や周辺の崖地・洞窟からは、多くの板碑が見つっています。円福寺境内のまわりでは、13世紀後半以降、つぎつぎと板碑が立てられていった様子うかがえます。



国宝に指定されている瑞巖寺の本堂



スタンプで模様を付けた漆器です。鎌倉の遺跡からも、同じようなものが見つかっています。



瑞巖寺境内遺跡出土スタンプ施文漆器(提供瑞巖寺)

松島における板碑の分布

松島における板碑の分布は、五^ご大^{だい}堂^{どう}方面の海岸部・円福寺周辺(現在の天^{てん}麟^{りん}院から瑞巖寺の裏手に広がる崖地・丘陵部)と雄島に大別できます。

海岸部・円福寺周辺で見つっている板碑の年号は、文永10年(1273)から貞和4年(1348:北朝年号)までに、ほぼおさまります。地元の砂岩・安山岩の石材を利用しながら、造立が始まったと考えられます。

雄島にある板碑は、弘安7年(1284)から明徳2年(1391)までが確認されています。ただし、この冊子で紹介する雄島海底板碑群の調査により、16世紀後半の戦国時代にいたるまで、板碑が立てられ続けていたことがわかりました。

板碑を造立する文化は、1270年代、海岸部・円福寺の周辺から始まり、すぐに雄島へも及んだと考えられます。当初、砂岩・安山岩が用いられましたが、牡鹿郡(石巻市)・遠島(牡鹿半島から新北上川の河口部一帯)方面から石材の供給が始まると、井内石(石巻市の稲井地区周辺で産出される。砂質頁岩、砂岩および粘板岩をはさむ)製の板碑が、あつというまに広まりました。



←松島における最古の板碑です。種子ア、文永10年(1273)、砂岩製。五^ご大^{だい}堂^{どう}前のトイレの裏、国道45号線に面して立っていますが、気がつく人はほとんどいません。

松島公園第1駐車場そばの板碑。種子キリーフ、弘安6年(1283)、砂岩製。松島の板碑は、観光客にほぼ知られていない文化財といえます。→



3. 霊場雄島の風景

JR仙石線松島海岸駅を降りて、瑞巖寺や五大堂とは逆の方向、南へ向かい、宮城県松島公園事務所わきの切通しをぬけると、南北220メートルほどの小さな島があらわれます。松尾芭蕉の『奥の細道』にも登場する雄島です。

12世紀から、その名前は、見仏という異能の力をえた僧が、法華経を唱え修行を行う場所として、京都や鎌倉にまで知られていました。また、発掘調査により、少なくとも12世紀後半以前から、火葬骨を陶器に納め、埋葬が行われていたと見られます。

13世紀80年代になると、そこに板碑の造立が加わります。とくに、徳治2年(1307)の年号をもつ巨大な頼賢碑が島の南端に立てられると、その中国風の装飾(雷文や唐草文)にならった大型の井内石製の板碑が、碑面を陸側に向けて立ち並んでいきます。その基部にはテラスがもうけられ、小型の板碑が立てられたり、火葬骨が埋納されました。

島の内部には、多くの石窟も見られます。磨崖仏が彫られているものもあり、また板碑・五輪塔などの石造物も納められたと考えられます。

こうして、雄島の白い凝灰岩の岩盤の上には、たくさんの板碑が立ち並ぶ風景があらわれました。中世の人々は、海のかなたに浄土を想い、死者が旅立つ特別の場所として、雄島を大切にしました。



雄島の全景

雄島の内部



雄島には、80点ほどの板碑が確認されています(『松島町史』)。



基部のみがのこった大型の板碑



石窟群



石窟の中の磨崖仏



頼賢碑の拓本(提供瑞巖寺)

種子ア、砂質頁岩(井内石)、高さ335.0cm、一山一寧筆、重要文化財

雄島妙覚庵の住職であった観鏡房頼賢の事績を記念する文章を記し、龍や雷文・唐草文などの中国風の装飾をほどこします。徳治2年(1307)以降に造立と推定。

4. 雄島周辺の海底を調査する

2006年、瑞巖寺宝物館の新野一浩さんが、雄島周囲の海底に数多くの板碑が沈んでいることを発見しました。翌2007年から、東北学院大学の日本中世史ゼミも調査活動に加わり、コロナ禍の休止期間をはさみながら、2025年まで板碑採集の活動が続けられました。

調査は、毎年4月終わり～8月初めの期間、2週間に一度大きく潮が引く午前中に実施します。ウェダースーツを着て海におり立ち、ピンポールで海底の泥の中を探って板碑を見つけ、取り上げた地点を測量し、地図に記録していきましました。採集した後は、一年ほど真水に浸けて脱塩処理を行い、拓本と資料カードの作成を進めています。

調査の結果、4,005点の板碑の破片や完形を採集しました。接合した石材などを整理すると、個体数は3,990点となります。このうち種子が確認された石材は1,252点、文字のみが確認された石材は46点です。少なくとも、1,200点ほどの板碑を発見したことになります。これらの板碑は、長い年月の間に自然崩落したり、人の手によって壊され、海中へすてられたものと考えられます。

石材のほとんどは、石巻市の井内石、牡鹿半島の雄勝石(粘板岩)でした(川原石も含まれます)。その他は、砂岩製の板碑が4点、安山岩製の板碑が10点(推定も含む)見つかりました。また、20点ほどの中世陶磁器・陶器の破片、4点ほどの五輪塔の破片も見つかりました。



調査の様子(2025年6月27日)



採集した多数の小型板碑

小さな板碑がたくさん見つかった

50cm前後以下の井内石製の小型板碑を多数見つけることができました。完形で見つかった板碑367点のうち、251点が50cm未満の大きさです。また、そのほとんどが種子のみしか刻まれていないこと、種子の種類がバン(金こん剛界大日如来)に次いでカ・イ・ラ(地蔵菩薩)が多いことなども特徴的です。これまでの雄島は、頼賢碑を頂点とする大型・中型の板碑が立つ中世の霊場というイメージでしたが、この発見は、従来の理解を大きく塗り替える成果といえます。

15世紀の板碑が見つかった

年号が認められる板碑は、31点見つかりました。このうち25点は14世紀のものですが、おうえい応永3年(1396)、おうにん応永7年(1400)、おうにん応仁3年(1469)の年号が刻まれた板碑破片が見つかったことは注目されます。これにより、雄島では、15世紀後半まで板碑が立てられ続けていたことが明らかになりました。

松島において、もっとも新しい板碑は、かんらんてい観瀾亭にあるぶんめい文明11年(1479)の小型の板碑です。この板碑の銘文の配列や年号の表記方法は、雄島から見つかった応仁3年の板碑破片と同じであることに気がつきました。これにより、観瀾亭の板碑は、もとは雄島にあったのではないかと、という可能性が出てきました。



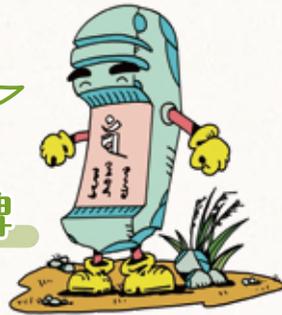
板碑 No.2

Medieval Stele 02

- 板碑破片
- 年代 応仁3年(1469)
- 法量 高さ49.6×幅14.6×厚さ4.1cm
- 石材 砂質頁岩(井内石)
- 被供養者 祐谷契公 ※文字の一部に金を確認
- 雄島海底より採集(2015年5月19日)
採集No.2709

5. 雄島海底板碑コレクション

ここからは、東北学院大学博物館で
展示している板碑の一部を紹介します。



① 源政行が立てた二つの板碑



板碑 No.3

Medieval Stele 03

- 種子 キリーク
- 年代 元亨3年(1323)8月21日
- 法量 (上)高さ71.0×幅54.0×
厚さ3.0cm(採集No.202)
(下)高さ95.0×幅60.0×
厚さ4.0cm(採集No.206)
- 石材 砂質頁岩(井内石)
- 供養者 源政行/被供養者 性賢
- 雄島海底より採集(2007年5月)
採集No.202・206

この板碑は、何者かによって割られた後、海底に投棄されたと考えられます。願文から、源政行が性賢みなものまさゆきという僧侶の三十三回忌を供養するために造立したことがわかります。源政行は、他に史料がなく詳細は分かりません。源氏の流れをくむ武士身分の人物だったのではないのでしょうか。(渡邊 隆仁)

(表)

(裏)



No.5⇒



No.4



板碑 No.4

Medieval Stele 04

- 種子 ア/キリーク
- 年代 元亨元年(1321)8月13日
- 法量 高さ126.0×幅49.6×
厚さ4.8cm
- 石材 砂質頁岩(井内石)
- 供養者 源政行等
- 雄島海底より集日(2006年7月12日)
採集No.43

この板碑も、破壊・投棄されたと考えられます。種字が両面にあり、アたいぞう(胎蔵界大日如来)とキリークあみだにょらい(阿弥陀如来)が刻まれています。キリーク部分は、接合する石材がさらに見つかりました(No.5)。願文は種字アの側みぎにのみあり、No.3に登場した源政行ら子供たちが、No.3の2年前、亡くなった親を供養するために立てたことが記されています。この親は、No.3の「性賢」を指しているかもしれません。はじめから両面種子の板碑だったのか、片面だけだったものを、その後、背面にも彫刻がなされたのか、謎が残る資料です。(渡邊 隆仁)

板碑 No.5

Medieval Stele 05

- 板碑破片
- 法量 高さ36.1×幅19.5×厚さ2.7cm
- 石材 砂質頁岩(井内石)
- 雄島海底より採集(2012年6月19日)
採集No.2038

②変身! その1 種子を改刻した板碑



板碑 No.6

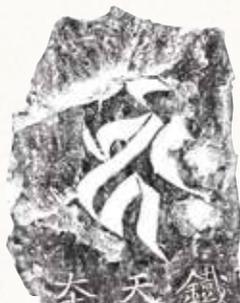
Medieval Stele 06

- 種子 カーン
- 法量 高さ90.3×幅22.0×厚さ6.2cm
- 石材 砂質頁岩(井内石)
- 鐵牛芳庭以下9名の結衆による造立か
- 雄島海底より採集(2006年6月28日)
採集No.3



キリーク

カーン



種子部分の拓本

種子はカーン(不動明王)、その下に9名の僧侶の名前を記した板碑です。

拓本を観察すると、もともとの種子はキリーク(阿弥陀如来)であり、それを改刻してカーンに仕立てなおしたことがわかります。よく見ると、僧侶の名前のところにも、もとの文字を消した痕跡を確認することができます。本来は、鎌倉時代末期～南北朝時代ころにつくられた板碑だったのではないのでしょうか。その後、戦国時代にいたるまでの間に、種子を改変し、銘文も削り落として僧侶の名前を刻みなおしたと考えられます。まさに、変身をとげた板碑です。

③変身! その2 板碑の石材を硯に転用?

板碑 No.7

Medieval Stele 07

- 板碑破片
- 法量 高さ28.8×幅17.0×厚さ3.2cm
- 石材 砂質頁岩(井内石)
- 雄島海底より採集(2010年6月13日)
採集No.1524



この板碑破片の大きな特徴は、硯として使われようとしていた可能性があることです。この板碑には、種子が見あたりません。これは種子の部分が広く削られているからで、その部分を硯として利用しようとしたと考えられます。

板碑は供養塔として立てられましたが、この事例のように、のちの時代に他の道具や資材などへ転用された事例が見られます。例えば、伊達忠宗の霊廟感仙殿を発掘調査した際には、石室のフタや土留め石に板碑の石材が利用されていたことがわかりました。

(渡邊 奏輔)



《参考資料》

硯転用板碑石材(提供瑞巖寺)→
瑞巖寺境内遺跡からは、明らかに硯へ転用した板碑破片の石材が出土しています。高さ8.95×幅6.25×厚さ1.0cm、砂質頁岩(井内石)、種子であった削り部分に金泥の付着が確認されました。

④ 銘文の配列に特徴あり



板碑 No.8

Medieval Stele 08

- 種子 カ
- 年代 文和2年(1353)3月21日
北朝年号
- 法量 高さ65.5×幅19.0×厚さ2.3cm
- 石材 砂質頁岩(井内石)
- 被供養者 智蔵禅門
- 雄島海底より採集(2008年5月22日)
採集No.898

鎌倉時代に造立された完形の板碑です。智蔵禅門^{ちそうぜんもん}という人物を供養するために立てられたと考えられます。基部は、地面に差し込みやすいように先端をとがらせる加工がほどこされています。

種子の下に紀年銘(年月日)を刻み、その右側に被供養者の名前を刻むという銘文の配列は、雄島の板碑の特徴といえるかもしれません。この板碑を含めて、建武^{けんむ}2年(1335)から応永13年(1406)にいたる10例を確認しました。(佐藤 航平)

ななめ横から碑面に光を当てると、種子や銘文の影が浮かび上がり、読みやすくなります。



⑤ 娘の往生を願う親心



この板碑の種子は金剛界大日如来を示すバンです。大日如来は、一切の仏・菩薩^{ほんじ}の本地とされる根本の仏です。奈良の大仏もその一つです。

種子バンの直下には、「奉為息女(息女のおんため)」という文言が記されています。板碑に年月日が刻まれる場合、種子の真下に配置されることが一般的ですが、この板碑では、種子の真下に亡き娘への供養の言葉を記し、年月日は二つに割って左右に配置しています。ここには、種子バンと亡き娘との結びつきを強め、娘の往生を願う、つよい親の思いがうかがえます。

(佐々木詩央)

奉為息女

正和五年
三月十八日

板碑 No.9

Medieval Stele 09

- 種子 バン
- 年代 正和5年(1316)3月18日
- 法量 高さ41.5×幅16.0×厚さ4.0cm
- 石材 砂質頁岩(井内石)
- 被供養者「息女」
- 雄島海底より採集(2007年5月20日)
採集No.422

⑥くらべてみよう 関東の板碑と形を似せる?

この板碑は、頭部を三角形に成形し、基部を凸型に加工しています。となりのページの武蔵型板碑むさしがたとくらべると、二条線にじょうせんは無いものの、同じ形にしようとしたのではないかと考えられます。

また、基部を凸型に削り出しているのは、設置の安定性を高めるための工夫といえます。別に用意した土台石に四角い穴を掘り、そこに板碑の凸部を差し込む、または雄島の岩盤を凹状に削り、そこに差し込むなどの方法が考えられます。こうすることにより、直接地面に突きさすよりも、安定して板碑を立てることができます。

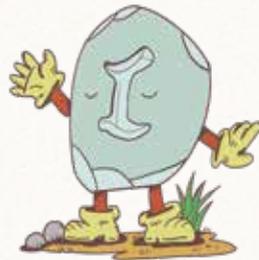
雄島には、関東の板碑と同じような形の板碑も立てられていたのです。(白谷 悠貴)



板碑 No.10

Medieval Stele 10

- 種子 ラ
- 法量 高さ62.6×幅26.2×厚さ3.4cm
- 石材 砂質頁岩(井内石)
- 雄島海底より採集(2013年6月23日)
採集No.2364



この板碑は、関東地方でつくられました。下半分が欠け、銘文はわかりませんが、武蔵型板碑といわれる形です。

頭部を三角に成形し、二条線と呼ばれる二本の溝が刻まれています。武蔵型板碑の多くは、種子にキリークを用いますが、これもその一例です。

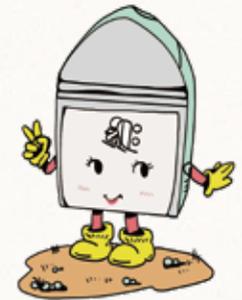
石材は、現在の埼玉県秩父地方で産出される緑泥片岩りよくでいへいがんが用いられています。秩父青石ちちぶあおいしと呼ばれるその石材は、薄く均一に剥がれやすく、石質が緻密で表面がなめらかな性質をもっています。

関東地方で板碑を見る機会があれば、武蔵型板碑かどうか、形や薄さなどを確かめてみるとおもしろいと思います。(白谷 悠貴)

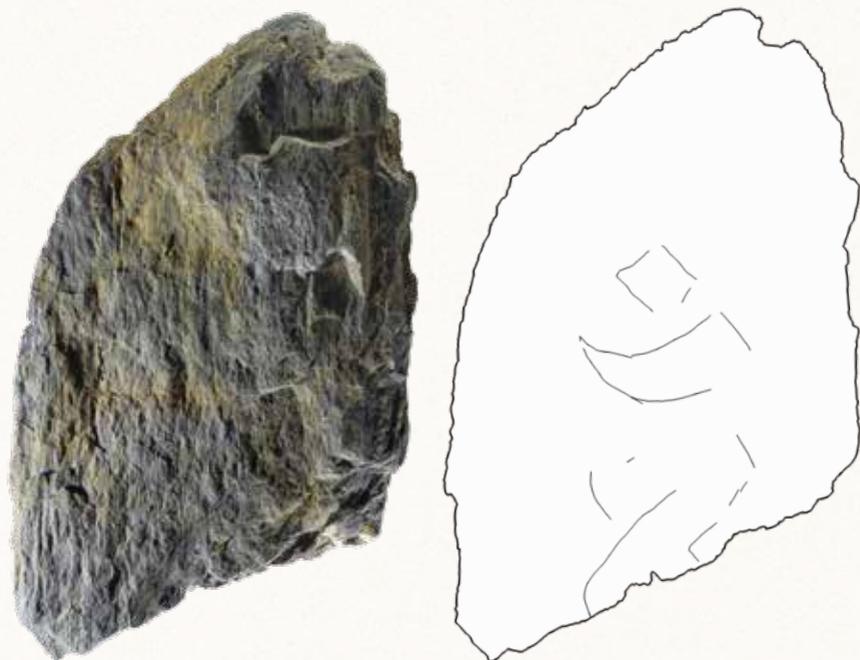
板碑 No.11《参考資料》

Medieval Stele 11

- 種子 キリーク
- 下部欠損
- 法量 高さ49.7×幅23.6×厚さ3.6cm
- 石材 緑泥片岩
- 東北学院大学博物館所蔵



⑦ つくりかけの板碑かも?



種子部分

板碑 No.12

Medieval Stele 12

- 種子 バン
- 下部欠損
- 法量 高さ52.0×幅32.0×厚さ6.0cm
- 石材 砂質頁岩(井内石)
- 雄島海底より採集(2008年7月3日)採集No.963

この板碑には種子バンが刻まれているのですが、輪郭線のみで、内側が彫刻されていないという特徴があります。種子を彫り込む作業の途中だったのではないのでしょうか。種子の

彫刻方法は、紙に刷毛書きした梵字バンを石材に貼り付ける、または石材に直接バンの輪郭を墨引きし、それを野書^{けが}いてバンの輪郭線を石材に写すことが考えられます。この板碑の発見により、雄島では、板碑石材に種子を彫り付ける作業が行われていたと想定できるようになりました。(楠 知暁)

⑧ 戦前に調査されていた板碑を発見!



松本源吉氏が作成した図

板碑 No.13

Medieval Stele 13

- 上部欠損
- 年代 延文6年(1361)3月12日
北朝年号
- 法量 高さ54.0×幅30.5×厚さ4.0cm
- 石材 砂質頁岩(井内石)
- 被供養者 智道禪門
- 雄島海底より採集(2007年7月1日)
採集No.621

この板碑は、上部欠損のため、種子が何かわかりません。しかし、銘文の内容を調べたところ、戦前、雄島に確実に立っていたことが判明しました。松本源吉氏の論文「陸前宮城郡の古碑」(『考古学評論』第3輯、1941年)には、この板碑の完全な形の図が掲載されています。種子はバンであったことがわかります。松本氏が調査した後、いつのころか、この板碑はこわされ、海中に投棄されてしまったと考えることができます。

雄島海底板碑群 板碑石材採集マップ



参 考 文 献

■板碑を調べ、学ぶ

- 大石直正・川崎利夫編『中世奥羽と板碑の世界』
高志書院、2001年
千々和到『板碑とその時代』平凡社、1988年
同 『板碑と石塔の祈り』(日本史リブレット31)
山川出版社、2007年
千々和到・浅野晴樹編『板碑の考古学』高志書院、2016年
藤澤典彦・狭川真一編『石塔調べのコツとツボ 増補改訂版』高志書院、
2025年
『仙台市史 特別編5板碑』仙台市、1998年



■松島の歴史と自然を知り、たのしむ

- 入間田宣夫・大石直正編『みちのくの都多賀城・松島』(よみがえる中世7)
平凡社、1992年
新野一浩・七海雅人「松島町雄島周辺海底採集板碑の報告(1)」
(『東北学院大学東北文化研究所紀要』44、2012年)
同 「松島町雄島周辺海底採集板碑の報告(2)」
(『東北学院大学東北文化研究所紀要』46、2014年)
同 「松島町雄島周辺海底採集板碑の報告(3)」
(『東北学院大学東北文化研究所紀要』47、2015年)
堀野宗俊『瑞巖寺の歴史』瑞巖寺、1997年
堀野宗俊編『霊場・松島』瑞巖寺、2005年
宮城いしづみ会『松島の板碑と歴史』1982年
『松島町史』全4冊、松島町、1989年～1991年
『松島瑞巖寺と伊達政宗』(三井記念美術館特別展図録)、
三井文庫・三井記念美術館、2016年
『松島ハンドブック』[“伊達”な文化]魅力発信推進実行委員会、2024年



脱塩処理中の板碑



KOREMITE

vol.11

編集・発行：東北学院大学博物館

発行日：2026年3月1日（初版）

〒980-8511 宮城県仙台市青葉区土樋一丁目3-1

TEL：022-264-6920

<https://www.ipc.tohoku-gakuin.ac.jp/tgum/>

 @tgu_museum



海底から引き上げたばかりの板碑

